濵田清夫先生を送る

岩　山　太次郎

濵田清夫先生は英語の達人である。英語で物が考えられる人である。英語を母国語とするものが書くように書き，話すように話すことができる稀な日本人である。だから英語のコンテキストでは，松下電器の商標は「ナ・ショ・ナ・ル」ではなく，濵田先生は完璧に [nǽʃnəl] と発音できる人である。

滋賀県のお生れの濵田先生が，いつ，どこで，どのようにして英語をご自分のものにされたのか先生からお聞きしたことがないので知らないが，おそらく戦争中に学ばれた大阪外事専門学校英米科の学生時代のことであろうと思う。戦後，シベリアから復員されてから学ばれた京都大学経済学部の学生時代には，すでに抜群の英語力を駆使してＩＳＡで活躍されていたことを私は人から聞いている。

英文学科が濵田先生をアメリカ研究の担当者としてお迎えしたのは1967年４月であった。旧制の京都大学経済学部の大学院で経済史を専攻された先生は，当時すでに，岸本誠二郎監修の『経済政策』（高文社，1952年）や『経済学史』（高文社，1957年）に「経済政策の原理」と「歴史学派」の論文を公刊しておられたし，また，Richard Schlatter の『私有財産――思想史的研究』（共訳『関書院，1959年）や Robert L. Heilbroner の『百万人の経済学』（原書房，1964年）の翻訳を出版しておられた。さらに，1952年から1967年３月までの15年間，京都アメリカ文化センターの参与として，アメリカ側から日米の文化交流に寄与されていたので，英文学科でアメリカ研究という分野でアメリカ経済を講じていただくには最適の方であった。

先生のご専門の分野でのその後のご業績には，Heilbroner の『経済思想の流れ――スミス以前より現代へ』（原書房，1970年）の翻訳，“The

New Industrial State by J. K. Galbraith”（『同志社アメリカ研究』V，1968年），「ガルブレイスの新しい産業国家」（『人文学』第115号，1970年），「資本主義社会の二つの進化論——ガルブレイスとハイルブローナー」（『同志社アメリカ研究』VII, 1970年），「不安の経済学」（『同志社アメリカ研究』XIII, 1977年）の論文がある。先生ご自身が編纂された *New Industrial State* by J. K. Galbraith（南雲堂，1970年）の教科書もある。

濵田先生は状況や立場が変化しても，それを積極的に受けとめ，正確な判断をくだすことができる，これまた稀な方である。学徒出陣で旧満洲で終戦を迎えられ，1947年4月までシベリヤで抑留生活を余儀なくされた先生は軍隊のことや抑留生活のことをめったに話されないが，めずらしく語られたことがあったことを思い出す。栄養失調で倒れていく人が次から次に出ていくとき，倒れなかったのは「鼠を取りその肉を食べたものだけだった」と。食べ物も十分与えられず，強制重労働が課せられた状況下では，生きる意欲のあるものの正しい判断であった。

15年間，アメリカ文化センター参与としてアメリカの側に立っての仕事のあと，英文学科では日本の側にたって研究・教育をする仕事への変化にも，真正面から向われた。「アメリカ研究」や「英語通信文」，「英作文」といった科目を担当されはじめて間もなく，英語論文を書く手引き書を作ってみましょうと声をおかけすると，先生は二つ返事で同意して下さった。その結果が数人の同僚たちとの編纂の *English Composition Manual*（同志社大学出版部，1972年）であり，さらに『英語論文作成法』（英潮社，1978年）になったものである。これらの書の編纂では，夏休みなどハード・スケジュールで原稿を仕上げていくとき，濵田先生は見事にリダーシップを発揮された。英語の達人がおられると，私などは安心して日本語的英語を「こんな英語ありますか」とお聞きできた。『実践高等英作文』（昭和堂，1986年）を共同編纂したときもそうであった。濵田先生のアメリカ研究は，たんにアメリカ経済を中心としただけでなく，幅の広さがある。「W. M. Vories と S. V. M.

トロント大会――伝道精神系譜」（『同志社アメリカ研究』XII, 1976年），「W. M. Vories と A. A. Hyde」（『同志社時報』Nos. 58 & 59, 1976年），「『ヨブ記』とワシントン・アーヴィングの『ムア人遺品の玉手箱』」（『同志社大学英語英文学研究』No. 50, 1990年）などの論文がこの点を物語っているし，医学，地学，人形浄瑠璃などの数多い英訳を手がけられているが，これらはそれぞれの分野の専門的学識があってはじめて可能なお仕事である。

大学行政の面で果たされた功績も大きい。1951年に組織された一般教育委員会（初代委員長は学長の兼任であった）の39年の歴史のなかで，濱田先生ほど長く一般教育委員長という重責を担われた方は他にないのではないかと思う。第一回目は1973年5月から1979年3月までの約6年間，第二回目は1980年4月から1983年3月までの3年間で，合計約9年間である。そして，この間に『私立大学とは――その教育の課題』（日本私立大学連盟，1977年）と『一般教育委員会中間報告――一般教育の回顧と展望』（大学基準協会，1980年）をまとめておられる。（その間，学生部長，学生部長代理，教務部長代理なども兼任された。）また，1986年4月の田辺校地開校の基礎となった教育研究条件整備委員会副委員長，整備計画業務委員会委員長を1980年4月より1983年3月まで努められ，学内の問題整備のみならず，地元との接渉にもあたられ，手腕を振るわれた。

23年間，英文学科にあって，また同志社大学にあって，常に真正面から教育・研究にあたってこられた濱田先生が満65歳のご定年を迎えられ，今，先生をお送りするのは淋しさをおぼえるが，ご退職後は花園大学でますますのご活躍をお祈りする次第である。先生と誕生日を同じくする William James は次のような文を残している。

> No fact in human nature is more characteristic than its willingness to live on a chance. The existence of the chance makes the difference . . . between a life of which the keynote is resignation and a life of which the keynote is hope.